

Bettina von Jagow und Oliver Jahraus (Hg.):
Kafka-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung.

川 島 隆

文芸書の老舗 Metzler 社は 2000 年以降、ドイツ語圏の作家・思想家だけでなく、さまざまな分野に関するハンドブックを立て続けに世に送り出してきた。そして来年 (2009 年) の春には、Bernd Auerochs と Manfred Engel の手により、新たに『カフカ・ハンドブック』が同社から刊行される予定となっている。——ところが、それに先立つ今年、カフカ生誕 125 周年を記念して、同じ名前を冠した書物が Vandenhoeck & Ruprecht 社から出版された。約 30 年前に Hartmut Binder が二巻本のハンドブック [Binder 1979] を編んで以来の国際的なカフカ研究の多様化と深まりを鑑みれば、その混沌とした研究状況を整理して見通しをつける作業が今日切実に求められているのは間違いない。各種ハンドブックやガイドブックの乱立状態にせよ、そういった事情の一つの表れであろう。

テキストの内と外

今回出版された『ハンドブック』は、四部構成で成り立っている。まず、①カフカの伝記的な事実を扱ったパートが最初に置かれ、②作品の成立と出版状況にまつわる事情が次に概観され、③解釈の多様なアプローチ方法に目配りがなされ、そして最後に④作品ごとの個別解釈でもって全体が締めくくられている。

編著者の一人 Bettina von Jagow は文学と医学言説の関係を扱う研究者であり、もう一人の Oliver Jahraus は、これまで現代文芸理論を手がかりにカフカ文学にアプローチしてきた。彼は近年、特にカフカの生き方と「書くこと」(Schreiben) の一致 [Kremer 1998] を前提に自説を展開している。その立場が、今回の『ハンドブック』全体の傾向にも色濃く反映されているのだ。例えば、21 世紀に入って英語圏で出版された複数の『カフカ必携』[Preece 2002; Rollston 2002] において、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究などの新しい研究手法が積極的に採り入れられ、テキストの外部へと視野を開いていこうとする姿勢が支配的であったのに対し、Jahraus はそうした方向には留保をつける。カフカ作品が置かれた歴史的・社会的コンテキストを重視するよりも、むしろ文学テキスト自体の文学性へのこだわりを保ち、あえて作品外の事象

へと目を向ける場合にも決して還元主義に陥らないよう努めること。そして、カフカにまつわる伝記的事実と作品をあくまで一体のものとして考察すること。それが今回の『ハンドブック』の基本姿勢をなしているのである。

カフカ伝記の可能性／不可能性

カフカの伝記を論じた本書冒頭の Christian Klein の論考は、そのようなバランス重視の姿勢を示した好例であると言えよう。そこで Klein はカフカ伝の試みの歴史を次の三つに分類する。①カフカの親友マックス・ブロートをはじめ同時代人の証言がカフカ像の基礎を形成していった時期、②Binder の旧ハンドブックが提供した豊富な文献学的資料を素材に、ドイツ語圏以外で多くの充実した伝記が書かれた 1980 年代以降の時期、そして最後に、③再びドイツ語圏で総合的な伝記の試みがなされるようになった 2000 年以降の時期。——Klein が旧ハンドブックの詳細な記述方法を批判し、あまりにも細かく切り刻んだ構成のせいでかえって脈絡がたどりにくい (S.25) と述べるとき、そこでは本書全体の綱領が示されているかのようである。およそ作家の人と作品の関係は決して一筋縄ではいかないもので、伝記的事実を細かく扱おうとすれば、どうしても作品への目配りがおろそかになる。逆に、作品解釈に気を取られると、それは往々にして「伝記」であることを止めてしまう。その困難な状況下でうまくバランスを取り、伝記的記述と作品解釈とを有機的に組み合わせた成功例として Klein が最も高く評価するのは、シラー研究者 Peter-André Alt が著した大部のカフカ伝 [Alt 2005] である。

本書自体に収録されたカフカの伝記的記述とはいえば、通年的に記述されているのではなく、「父親」「弟妹たち」「女性」「文通相手」「マックス・ブロート」「日記」などのように、項目別に独立した記事が並んでいる点に特徴がある。第一部には他に、医学言説史の視点からカフカを論じた『ユダヤ人の患者』[Gilman 1995] で研究者のあいだに大きな波紋を呼んだ Sander Gilman の手になる「役人としてのカフカ」「カフカと病气」という二つの項目が収められており、社会的な視点を補充している。

ドゥルーズ&ガタリからの逃走？

旧ハンドブックの時点からの状況変化として最も重要なのは、往時のブロート版全集に加えて校訂版および写真版という二つの全集が新たに刊行されていることに他ならない。本書第二部でこの問題を扱うのは、Anette Steinich である。彼女は、校訂版全集の編集方針の欠点を明らかにした上で、もう一つの全集が刊行されることになった経緯を総括する。すなわち、作品の意味内容よりもエキリチュールの運動そのものを問うテキスト生成論という研究ジャンルの需要に応じて、写真版全集は日の目を見ることになったのである。また、第二部では Steinich の記事に

加えて「生前の出版」(Joachim Unsel)が独立した項目として設けられ、カフカ文学の全体像が成立していくプロセスを歴史的に見る複眼的な視座が確保されている。

第二部には他にも、作品成立の前提をなす歴史的・社会的事象についての視点を提供する項目が含まれている。そこを見わたして感じられるのは、ドゥルーズとガタリの1975年のカフカ論の及ぼした影響の強さ(あるいは、その影響力に対する反発)である。周知のように、カフカは1911年の日記で同時代のイディッシュ語文学とチェコ語文学を取り上げ、ドイツ文学におけるゲーテのような傑出した存在がいなかったからこそ国民＝民族の政治的な統合に寄与するという「小国民の文学」の特性を定式化した。これをドゥルーズらは、プラハ・ドイツ語によるカフカ自身の創作活動の原理として――すなわちメジャーな支配的文化の内部において、あえて支配的言語を道具としてゲリラ的に抵抗を続ける「マイナー文学」のマニフェストとして読み換えた。この読み方はさまざまな方面で広く反響を呼んだが、その一方で、カフカ研究の枠内においては概ね批判的に扱われてきたと言えよう。特に、アメリカ合衆国におけるカフカ翻訳・研究の権威 Stanley Corngold は、ドゥルーズらの読み方の恣意性と知識の欠如とを厳しく批判し、ひいてはカフカ文学を政治化する傾向一般に異を唱える [Corngold 2004]。今回の『ハンドブック』においても、そうした批判を引き継ぐ格好で、カフカが生きた時代の政治・文化・社会状況についての正確な知識の伝達に力が注がれるかたわら、そうした時代状況には還元しきれないカフカ文学の固有性とは何かが追及されているのだ。

カフカにおける「書くこと」――本書の性格からして、ある意味最も重要な項目――を担当するのは、上述の Corngold である。そこでこの論者は、従来からの自説の延長線上で、カフカに見られる二つのレベルの自己否定、すなわち自作を抹消しようとする文学上の傾向と、文字通りの死へと向かう現世否定的な思想とを取り上げ、それを「グノーシス主義」(S.152)の概念から説明している。

この論考に続いて、長年カフカにおける「ユダヤ性」のテーマに取り組んできた Hans Dieter Zimmermann が、カフカが生きた時代のプラハの政治・文化・社会状況を総括する。そこでは特に、イディッシュ語文学とチェコ語文学という二つの「小国民の文学」に焦点が当てられる。ただ Zimmermann は、先に触れた1911年の日記記述を手がかりに、カフカはチェコ文学には無知であったと断定する (S.175)。その結果、そこでは、従来から長編『城』への影響が指摘されてきた女性作家ボジェナ・ニェムツォヴァーと、Zimmermann が特に『失踪者』との関係を強調する宗教・教育思想家コメニウスを除いて、実質的にチェコ文学とカフカのあいだをつなぐ経路が閉ざされてしまっている。その点はやや残念である。

世紀転換期のモダニズム文学の流れの中にカフカを位置づける Scott Spector は、ドゥルーズとガタリの「マイナー文学」論に依拠してカフカ周辺のドイツ語作家を論じた [Spector 2000]

研究者だけあって、今回の『ハンドブック』執筆陣の中では比較的ドゥルーズらに好意的な位置にいる (S.185f.)。Spector は、一見すると歴史からの文学の自律性というものを主張するかに見えるモダニズム文学が、実はそれ自体として歴史への強い志向を有していたことを、ポール・ド・マンのニーチェ論を手がかりに指摘する。この論考が提供する視点は、カフカ文学のみならず、文学と時代の関わり一般を考える上でも示唆的なものであろう。

さらに「カフカとユダヤ」については独立した項目 (Andreas B. Kilcher) も設けられており、ユダヤ関係文献とカフカの接点が網羅的に数え上げられている。さらに、カフカが大学で学び、かつ法律家として携わっていた法学上の言説がいかに作品内へ取り込まれているかという問題を Ulf Abraham が、カフカと映画の関係を Jahraus が論じている。

実存からテキストへ

カフカ解釈の流れを概観する第三部においては、旧ハンドブックとの差異が最も明瞭に表れている。神学解釈や実存主義解釈の影がごく薄くなる一方で、ベンヤミンやアドルノ、デリダなどの思想家がらみの話題が質・量ともに充実して扱われており、時代の変化を感じさせる。独立した項目として、「寓話的なもの」「世界文学」「シオニズム解釈」「文芸理論」「解釈学批判」「精神分析」「ジェンダー」「脱構築」等が設けられ、そのうち「世界文学」(Monika Schmitz-Emans)の記事は、論集『カフカと世界文学』[Engel / Lamping 2006] を叩き台にしつつ、カフカと間テキストの関係にある作家たちを、ホメロスから村上春樹に至るまで幅広く概観する。また、旧ハンドブックの記述ほど体系化されていないものの、Waldemar Fromm がカフカ受容史を、Els Andringa がカフカ解釈史をそれぞれ扱い、多様な流れをバランスよく簡潔にまとめている。この三つの記事は、本書全体の見通しをつける上で役に立つだろう。

編者の Jahraus が自著 [Jahraus 2006] から再掲した「カフカと文芸理論」の項は、カフカ解釈の一つの極を示したという意味で興味深いものとなっている。そこで Jahraus は、素朴な伝記還元主義のみならず、社会的コンテクストを重視する解釈方向も批判の俎上に載せ、カフカ作品の特異な性格へと目を向けることを推奨する。すなわち、一方では解釈を誘発しつつ、他方では解釈の不可能性を宣告するという構造を、カフカのテキストの本質として取り出してみせるのである。その際、主な範例となっているのは、カフカ自身がその解釈不可能性を語ったという伝記的事実が残されている作品『判決』であるが、そこから Jahraus は一歩進み、「カフカの全てのテキストは、自分自身の解釈不可能性について語っている物語として読むことができる」(S.313) と結論づける。

そこまで一般化が可能かどうかはさておき、文学作品の解釈という行為一般を疑問に付す部分がカフカ作品に含まれているのは確かであろう。Detlef Kremer の論考は、そのような解釈 (学)

批判的な側面へと光をあてる解釈方法がカフカ研究史上においてどのように形成されてきたかを、ベンヤミンからアドルノを経てドゥルーズ／ガタリやデリダの読解へと至る流れとして整理する。この流れは、もちろん狭義のドイツ文学研究の場において生じたものではない。しかし **Kremer** は、フリードリヒ・バイスナーとマルティン・ヴァルザーの師弟が先鞭をつけた、自己言及的かつ自己否定的なカフカの「語り」の特性についての一連の研究を、上記の解釈批判的な解釈の系譜と同時並行的にして親和的なものと評価してもいる (S.342ff)。この手続きにより、ともすれば互いにすれ違いがちな現代思想とドイツ文学研究の成果を、同一の地平上に捉える道が開かれている。

第三部に収録された論考のうち、「カフカと寓話」(Sabine I. Gözl) は **Jahraus** と近い視点からカフカの寓話作品を解釈したもの。「カフカと精神分析」(Henry Sussman) は、フロイトとラカンの理論との関係からカフカ独特の隠喩法を論じる。「カフカと脱構築」(Maximilian G. Burkhardt) は、脱構築思想の起源と展開、さらにはドイツでの受容状況までを概観した上で、カント哲学を一つの観測点に設定し、デリダの思想とカフカ文学の接点を探っている。以上三本は、上で紹介した **Jahraus** と **Kremer** の議論を補足するものと位置づけられるだろう。そして、以前ケンブリッジ大学の『カフカ必携』[Preece 2002] にも書いていた Dagmar C. Lorenz の「カフカとジェンダー」は、カフカ作品に見られるジェンダー観の時代的制約をフェミニズム的な視点から批判的に取り上げる方向の先行研究[Boa 1996] に対して、むしろ伝統的な性役割を脱構築するような要素をカフカ作品から取り出している点に特徴がある。

芸術と芸術家

第四部の作品解釈パートにおいては、長編と有名作品を除いた中短編を、初期・中期・後期の三つに分けて編者 von Jagow が扱うという編成になっている(最後の部分は **Jahraus** との共同執筆)。ここでは、作品成立史・刊行史が簡単に総括され、「芸術」「芸術家」の概念を手がかりに作品解釈の範例が示されている。

あとの部分については、実績ある研究者の充実した布陣により、概ね手堅くまとめられているようだ。かねてから『判決』に強い関心を寄せ、自著[**Jahraus** 2006] で「権力装置」をキーワードに同作を論じた **Jahraus** が、その再編集版をここに掲載している。さらに、本書第二部で「カフカと法」を担当した **Abraham** が『変身』を扱い、先行研究を細かく分類しながら作品の問題点を整理している。そして、文化史に造詣の深い Alexander Honold が『流刑地にて』を身体論の観点から論じている。長編(とそれに関連する作品)のうち、『火夫』+『失踪者』は **Bodo Plachta** が担当し、作品の成立背景から解釈受容史までを手際よくまとめている。これは、かつてレクラム文庫の解釈例集[Müller 2003] に寄稿されたものの増補改訂版である。『審判』

+『掟の前』を扱うのは、現代思想を援用してカフカを読む Hans H. Hiebel で、彼はここでもフロイトやラカンの説を手がかりに作品を解釈してみせている。校訂版全集の編集者 Michael Müller は、以前自ら編んだ論集 [Müller 2003] でも『城』を論じていたが、今回、主人公 K と作者カフカ＝芸術家との一致という点を強調しつつ同作品を論じ直している。

最後に確認するなら、本書は、カフカの人と作品についての体系的な見取り図を提示することを企図したものではない。その点は Binder の旧ハンドブックとは大きく異なり、資料集というよりは論文集の性格が強いと言えるだろう。それだけに、各項目の独立性は高く、トピックの重複も避けられていない。研究の手引書としてはあまり使い勝手がよくないと思われるが、本書に何か魅力があるとすれば、それは他ならぬこの統一感のなさにあるかもしれない。今日のカフカ研究は、そもそも体系的に捉えようとするのは無意味なものとして我々の目の前に屹立している。本書は、いわばその研究状況の縮図をなす小宇宙なのだ。

(Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2008)

参考文献

- Alt, Peter-André: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München 2005.
- Binder, Hartmut (Hrsg.): *Kafka-Hanbuch in 2 Bänden*. Stuttgart 1979.
- Boa, Elizabeth: *Kafka. Gender, Class and Race in the Letters and Fictions*. Oxford / New York 1996.
- Corngold, Stanley: *Lambent Traces. Franz Kafka*. Princeton 2004.
- Engel, Manfred / Lamping, Dieter (Hrsg.): *Franz Kafka und die Weltliteratur*. Göttingen 2006.
- Gilman, Sander L.: *Franz Kafka, the Jewish Patient*. New York 1995.
- Jahraus, Oliver: *Kafka. Leben, Schreiben, Machtapparate*. Stuttgart 2006.
- Jahraus, Oliver / Neuhaus, Stefan (Hrsg.): *Kafkas „Urteil“ und die Literaturtheorie. Zehn Modellanalysen*. Stuttgart 2002.
- Kremer, Detlef: *Kafka. Die Erotik des Schreibens*. 2., verb. Aufl. Bodenheim 1998.
- Müller, Michael (Hrsg.): *Franz Kafka, Romane und Erzählungen. Interpretationen*. 2. Aufl. Stuttgart 2003 [1994].
- Preece, Julian (ed.): *The Cambridge Companion to Kafka*. Cambridge 2002.
- Rolleston, James (ed.): *A Companion to the Works of Franz Kafka*. Rochester 2002.
- Spector, Scott: *Prague Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle*. Berkeley 2000.